コミュニティとアートの相互関係について
―日本のアートプロジェクトを事例に―

The mutual relationship between community and art
-case study of Japanese art activity called “Art Project”

時空間デザインプログラム
10M55075　中村有理沙　指導教員　土肥真人
Environmental Design　Program
Arisa Nakamura, Masato Dohi

ABSTRACT

Today in japan, the number of art activities at public space called “Art Project” (abbreviation: AP) is growing from 90s. However, there are contradictions between community and art. Community has its own rule and limited with social orders. On the other hand, art itself is originally energetic and spontaneous. This research aims to figure why these two seek each other thorough AP. In this research, we reviewed the historical background of both public art and community deal to reveal how AP appeared, defined AP as art activity which has relationship with community, and divided it into four stages. After investigating various tendencies of 278 research APs, we gathered opinions about them from newspapers and divided opinions both community and art side. According to the KJ method, we created opinion structure map about APs from the opinions and figured how each sides said about APs. Finally, by using the map, I searched deference of opinions between 5APs In conclusion, community seeks art since it asks present status, and art seeks community as target to express.

１章：研究の概要

１－１　研究の背景と目的

アートプロジェクト（以下 AP）と呼ばれる、まちを舞台にするアート活動が 90 年代後半から増加している。AP はまちを舞台にするため、コミュニティとアートが必然的に相互に関わり合うものである。だが、コミュニティはルールや秩序を持ち、アートは自由でアヴァンギャルドな性質を持つため、両者は本質的に相対するものと言える。この両者が相互に関わり合う根拠を明らかにすることを本研究の目的とする。

１－２　先行研究

特定の AP について研究したもの(5)、日本各地の AP を事例に AP が提起する芸術表現の意義に着目したもの(7)、全国の AP について網羅的に調査した研究(17)がある。またコミュニティとアートの相互関係について述べた研究は、コミュニティ・アートに関する論文(2)に詳しい。しかしコミュニティとアートの共働の根拠を、AP を通して網羅的に考察した研究はない。

１－３　研究の対象

全国で実施されている AP の内、NPO 法人アート＆ソサイエティ研究センター1)が所持する AP リストに掲載されていた AP と AP に関する先行研究の事例として挙げられていた AP の和集合（全 278 件）を本研究の研究対象とする。

１－４　研究の方法と論文構成

2 章では調査の準備段階として、先行研究からパブリックアート史における AP の位置づけを明らかにし、AP の定義づけと時代区分をする。3 章では、研究対象とした AP の実態を明らかにする。4 章では研究対象とした AP に関する新聞記事を収集し、発言者の立場が判断できた記事から意見を抽出、意見ラベルを作成し、KJ 法から意見構造図（KJ 図）を作成する。この KJ 図を用いて発言者の立場から意見の多寡を分析する。5 章では KJ 図を用いて AP 毎に意見構造を分析する。6 章で総合的考察を行い、コミュニティとアートの共働の根拠を明らかにする。働の根拠を明らかにする。

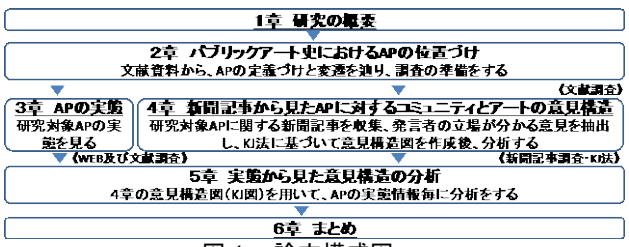

図１　論文構成図

２章：パブリックアート史における AP の位置づけ

2 章では文献調査からパブリックアート史とコミュニティ史における AP の位置づけを把握する。

２－１　パブリックアート史とコミュニティ史からみる AP

パブリックアート史をみると、初期のパブリックアートは恒久設置である彫刻型が多かったが、80 年代にパブリックアートに対する批判 2)が起り、徐々にその有り方は変化した。90 年代頃からパブリックアートはコミュニティを意識してアートを活かすようになり、都市開発と一体化させた作品設置や AP が始まった。95 年の阪神淡路大震災と 05 年の総務省による「新しい公共空間」の提唱以降のコミュニティの再評価に対応するものでもあった。

２－２　AP の定義【表 2】

定義に関する記述のあった先行研究は 10/17 件、「参加／共働型である」（8/17 件）が最も多かった。また時系列で見ると、2000 年代後半から「地域活性を図る」という定義が現れる。本研究では、AP をより広域に捉えるため、「コミュニティとの関係を持ちながら実施される現代アート活動」と定義する。

２－３　AP の時代区分

AP はコミュニティとアートの協働の切り口から見ると 4 つに時代区分できる。第 1 期「黎明期:1990～1994」に都市開発やまちづくりとアートが連動しコミュニティ活性が開始された。第 2 期「発達期Ⅰ:1995～1999」に市民活動が活発化する土壌が形作られ、AP を主催する実行委員会が組織され始めた。第 3 期「発達期Ⅱ:2000~2004」に過疎や高齢化問題を抱えた

表１　パブリックアート史とコミュニティ史の比較

年代	パブリックアート史	コミュニティ史	時代区分
1940年代（戦中）	・軍国主義賛美の人物像(銅像)が設置される	・1940年9月「部落会町内会等整備要綱」発布 ⇒各市町村において町内会等が設置され、戦時下の国民動員組織として機能	
1940年代（戦後）	・GHQにより軍国主義賛美の彫刻作品が撤去される	・1947年5月「町内会部落下位またはその連合会等に関する解散、就職禁止その他の行為の制限に関する政令」(1947年政令第15号) ⇒GHQにより町内会等は解散する	
1950年代	・屋外彫刻作品の再鋳造、新しいイデオロギーを表現する彫刻作品設置が進む	・1952年ポツダム宣言により1947年政令第15号は無効に ⇒町内会等が各地で復活	
1960年代	・自治体による彫刻設置型事業が始まる	・高度経済成長期に突入 ・住民運動が活発化し「住民参加・市民自治」が注目される	
1970年代	・1978年に東京都八王子市が彫刻のあるまちづくり事業を開始。以降彫刻とまちづくりを関連づけた事業が全国各地で起る。	・1971年4月自治省が「コミュニティ(近隣社会)に関する対策要綱」を定める ⇒71～73年度に「モデル・コミュニティ地区」(計83区)制定 ・異質性排除の住民運動が現れる	
1980年代	・野外彫刻展が始まる ・日本のパブリックアートに対する批判が起こり始める	・1983年自治省が「コミュニティ推進地区設定要綱」を定める ⇒83～85年度に「コミュニティ推進地区」(計147地区)制定	
1990年代	・都市開発と一体の作品設置が起る ・APが展開し始める ・都市型APが始まる	・1990年自治省が「コミュニティ活動活性化地区設定施策」を定める ⇒90-92年「同地区」(計141地区)設定 ・1993年自治省が全市町村でコミュニティ政策を実施	第1期「黎明期」1990-94
		・1995年阪神淡路大震災が起こり、コミュニティの重要性が高まる	第2期「発達期」1995-99
2000年代	・野外彫刻展が芸術祭へと変化する ・地方型APが始まる		第3期「発達期Ⅱ」2000-04
	・各地でAPが実施される	・2005年総務省が「新しい公共空間」の理念を打ち出す ⇒町内会等のコミュニティに対する期待の高まり	第4期「全盛期」2005-11

表２　APの定義

文献番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
年	1997	2001	2001	2002	2003	2004	2004	2004	2007	2008	2009	2009	2009	2010	2011	2011	2011	
AP定義項目：参加／協働型である	●	●	－	●		●		●		●		－		●		●		8
コミュニティ(場／人)が関わる	－	●	●	－		－		●		－		－		－		●		4
日常な場での活動である	●	－	－	－		－		－		－		－		●		●		3
コミュニケーションを重視する	●	－	●	－		－		－		－		●				－		3
社会とアートの関係構築をする	●	－	－	●		－		－		－		－		－		－		2
ネットワーク形成を重視する	●	－	－	●		－		－		－		－		－		－		2
地域活性を図る	－	－	－	－		－		－		●		●				－		2
プロセスを大切にする	－	－	－	●		－		－		－		－		－		－		1
表現の場が様々である	－	－	－	－		●		－		－		－		－		－		1

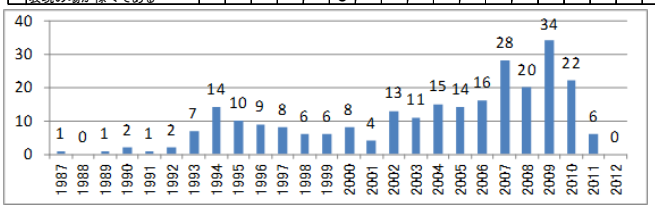

図２　開始年別AP数の推移

地方でAP[3)]が台頭する。第4期「全盛期:2005～2011」には助成事業などAPを支える仕組も整い始める。

３章：APの実態

3章では研究対象APについて、文献及びウェブ調査により詳しく調査し、全体の基礎的な傾向を示す。

表３　調査概要

対象AP		278件
調査方法	資料調査	NPO法人アート＆ソサイエティ研究センターリスト文献1-17
	WEB調査	時期:2012年5-6月
調査項目	・開始年　・実施地域　・活動(実施頻度、料金) ・活動主体　・実行委員会の有無 ・作品(有無、形態、常設仮設、設置場所)	

３－１　APの基礎的な傾向

開始年別に見ると、90年代半ばに一回目のピークがあり、2009年に最も多くのAPが開始されていた。次に実施地域別に見ると、都市地域[4)]で実施されているAP（230件）が最も多かった。APの活動に着目すると、実施頻度は年に1回開催のAP(104件)が、料金形態は無料公開であるもの(114件)が最も多かった。活動主体は、NPO(市民団体)が主体となる事が最も多い(71件)。さらにAPの作品に着目すると有形無形の両方の作品形態をとるもの(167件)、仮設設置であるもの(104件)、屋内屋外の両方で展示・活動するもの(126件)が最も多かった。

表４　APの各種の分類

活動			
実施頻度	件数	料金形態	件数
単発	58	無料	114
数年に1回	30	有料	33
年に1回	104	両方	53
年に数回	77	不明	78
不明	9		

実施主体	件数
アーティスト	65
市民団体	71
教育・研究機関	56
行政	53
企業・商店	45
美術館・博物館	19
寺社	4
不明	74

他地域との連携	件数
連携有	202
連携無	59
不明	17

実行委員会	件数
有	135
無／不明	143

実施地域	件数
全国	12
複数県、複数都市・農村	14
都市(人口2000人以上)	230
農村(人口2000人未満)	15
不明	7

作品(有り:254　無し:15　不明:9)					
形態	件数	常設仮設	件数	場所	件数
有形	57	常設	20	屋内のみ	109
無形	23	仮設	104	屋外のみ	31
両方	167	両方	12	両方	126
該当無し	15	該当なし	15	不明	12
不明	16	不明	127		

４章：新聞記事から見たAPに対する意見構造

4章では研究対象APに関する新聞記事からコミュニティとアートの意見構造図を作成、分析する。

４－１　調査方法

調査方法の概要を【表5】に示す。研究対象である278件のAPに関する記事を、ヨミダス文書館（読売新聞データベース）を使用して収集した。各AP名を検索ワードとして用いて、90/278件のAPについて記事が収集出来た。該当記事総数は913件であり、この内立場の判別できる意見の入った記事が527件あった。この意見を発言者別にアート(a)側、アート且つコミュニティ(a/c)側、コミュニティ(c)側に分類をした。それぞれの立場の定義を【表6】に示す。この定義に基づいて分類出来た意見は834件あった。これらを文章内容別に分解し、1007件の意見ラベルを作成した。全意見ラベルをKJ法によりグループ化し、意見構造図（KJ図）を作成した。

表５　調査概要

調査方法	新聞記事検索
調査実施期間	2012年5～6月
記事検索対象時期	1986年9月以降
使用データベース	ヨミダス文書館（読売新聞社）
検索ワード	各プロジェクト名
該当記事総数	913件
該当記事のあったAP数	90/278件
立場の判別できた記事数	527/913件
立場の判別できた意見数	834件
KJ時に分割されて出来た意見ラベル数	1007件

表６　発言者立場の定義と例

発言者立場	定義	例
a	アートを提供する側であり、且つ地域に縁のない人物	アーティスト、総合ディレクター
a/c	アートを提供する側であり、且つ地域に縁のある人物	地元出身アーティスト
c	アートを提供しない側であり、且つ地域に縁のある人物	自治体、現地NPO法人

４－２　KJ図の全体像について

KJ図について説明する。上位ラベルは全部で7件（A~G)、中位ラベルは26件（a~z)、下位ラベルは145件（1~145)、意見ラベルは1007件（1~1007）ある。

上位ラベルには、「A:APには、工夫の余地がある」(全51件)、「B:APは社会全体に対して働き掛ける」(118件)、「C:APはアートを閉鎖的でないものにする」(108件)「D:APはアーティストに新たな芸術活動の機会をもたらす」(134件)、「E:APは長期的にまち／地域と関わることができる」(38件)、「F:APは人々の関係を構築する」(135件)、「G:APはまち／地域の現状に変化を起こす」(423件)がある。上位ラベルについては、Gが最も件数が多く、一方Eが最も少ない。

４－３　コミュニティとアートの意見構造について

各発言者の立場の内訳は以下の通りである。以下立場別の考察について述べる。

（１）コミュニティ側の意見分析

コミュニティ側の意見は全部で560件あった。意見の多かったラベル群は、下位レベルでは多い順に「Ch(32):自由にアートを体感する」が23件、「Ch(34):アートを体感してアートに興味を持つ」が14件、「Gu(106):アートを使ってまちおこしのきっかけにする」が13件あった。中位レベルでは「Gv:APによりまちに人が訪れる」が52件、「Gu:APはまちを活性化する」50件、「Ch:APはアートに対する興味関心を高める」が43件あった。上位レベルでは「G:APはまち/地域の現状に変化を起こす」が269件、「C:APはアートを閉鎖的でないものにする」が74件あった。全体的に見ると、コミュニティ側はAPを体感してアートへの興味関心を高めたり、まち/地域の現状を変える起爆剤となるという意見が多く見られた。

またコミュニティ側の意見が占める割合が高いラベルを見ると、例えば注「Ac:AP自体が現状抱えている問題」が10/11件、「A:APには工夫の余地がある」が38/51件をしめ、コミュニティ側はAP自体が現状抱えている課題（Ap）に意見が偏っていた。

（２）アート側の意見分析

アート側の意見は全部で338件あった。意見の多かったラベル群は、下位レベルでは多い順に「Dk(50):アーティストが表現したいものを表現している」が17件、Dj(44):地元民から刺激をうける」が14件あった。中位レベルでは「Gs:APが地

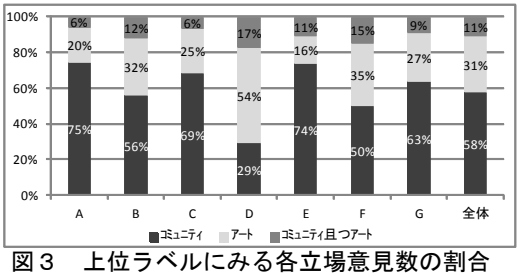

図３　上位ラベルにみる各立場意見数の割合

域資源を活かす」が 56 件、「Dk:AP を通してアーティストが表現の幅を作る」が 30 件、「Dj:他分野や複数の人と作品を作ることは刺激がある」が 27 件であった。上位ラベルでは「G:AP はまち/地域の現状に変化を起こす」が 116 件、「D:AP はアーティストに新たな芸術活動の機会をもたらす」が 72 件であった。特に D はアート側の意見である割合が高く、例えば Dk(50)は全てアート側の意見であった。全体的に見るとアート側は、AP で自分の表現を実現したり、新たな表現を獲得して表現幅を拡大したり、地域の資源を活かしたり、地元民や複数人から刺激を受ける意見が多く見られた。

（３）コミュニティとアートの意見比較

上位ラベル別各立場意見数の割合を見ると、全体の割合と比較して「D:AP はアーティストに新たな芸術活動の機会をもたらす」ではアート側の意見数割合が 54%と極端に高くなっていることが分かる。同時に全体の割合と比較して「E:AP は

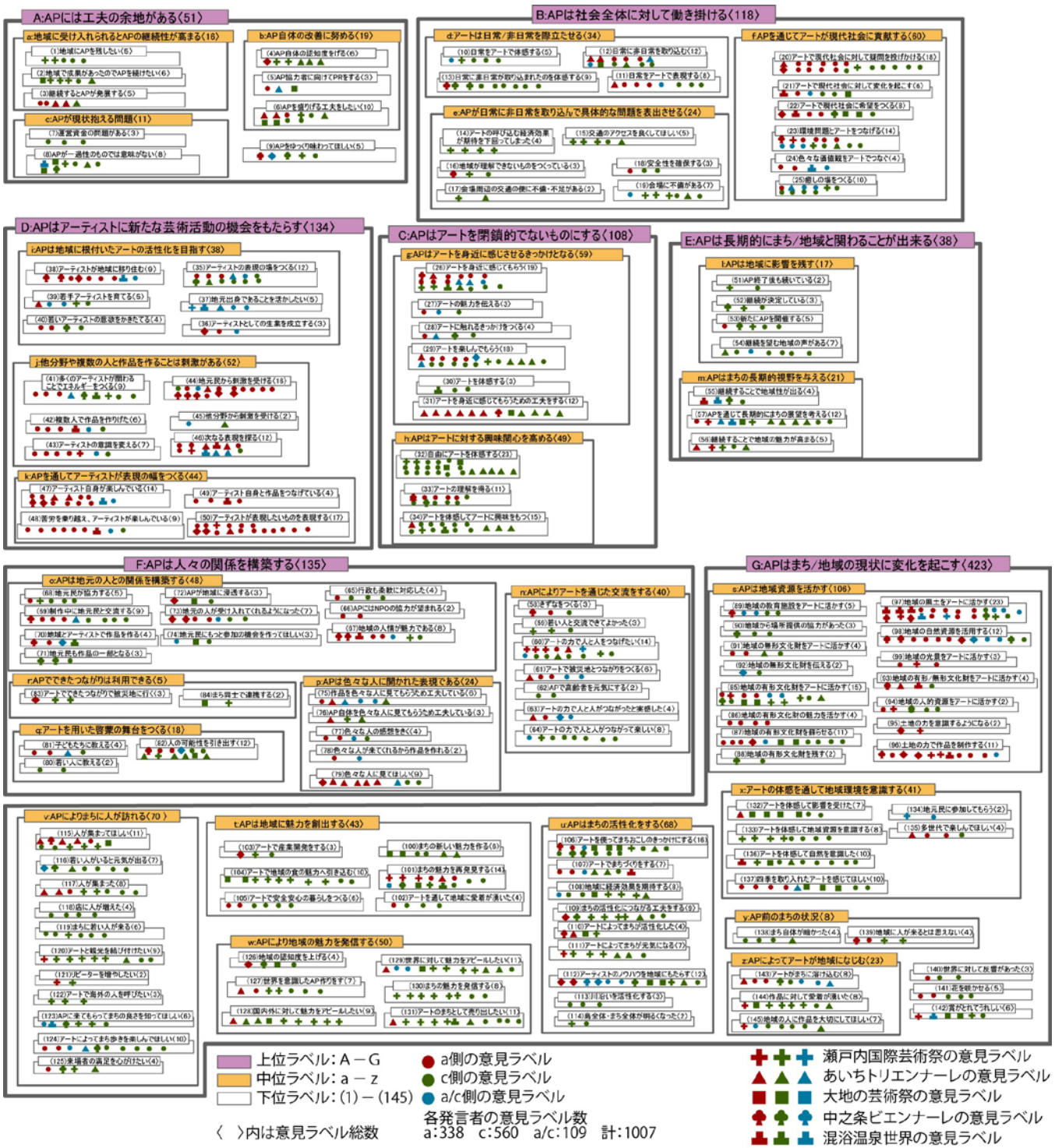

図４　立場別及び AP 別にみる KJ 図

長期的にまち/地域と関わることができる」ではコミュニティ側の意見数割合が極端に74%と高くなっていることが分かる。

５章：AP 毎の意見構造の分析

5 章では、4 章で作成した KJ 図を用いて意見ラベル数の多い AP 毎にコミュニティとアートの意見構造を分析する。

５－１　分析の手順

各意見ラベルには、GIS ソフトを利用して複数の実態情報（意見ラベル抽出元の AP 名、その AP の開始年や実施頻度、実施エリア等）を付随させている。ここではこの GIS を利用して、AP 毎に KJ 図上における特徴を把握する。各 AP の概要は【表 7】の通り。

５－２　瀬戸内国際芸術祭

瀬戸内国際芸術祭で把握された意見はコミュニティ側が 127 件､アート側が 25 件､コミュニティ且つアート側は 4 件、合計 156 件であった。意見の多くはコミュニティ側である。下位ラベルでは「Gt(104):アートで地域の食の魅力へ引き込む」が 6/10 件、「Gw(130)まちの魅力を発信する」が 6/8 件、「Gv(120):アートと観光を結び付けたい」が 6/9 件､「Fn(60):アートの力で人と人をつなげたい」が 5/14 件ある。中位ラベルでは「Gw:AP により地域の魅力を発信する」という意見が全 50 件中 21 件、また「Be:AP が日常を取り込んで具体的な問題を表出させる」という意見が全 24 件中 12 件と半数を占め、どちらも全てコミュニティ側の意見であった。上位ラベルを見ると「G:AP はまち/地域の現状に変化を起こす」という意見が全 423 件中 95 件を占め､瀬戸内国際芸術祭の全意見 127 件のうち約 3/4 を占める。以上から、瀬戸内国際芸術祭においてコミュニティはアートによってつながりをつくり、まちの魅力を対外的にアピールしたいと望む意見が多い。また AP がまちに変化を起こすことが認識されている一方で､AP の問題点に関する意見も多かった。

５－３あいちトリエンナーレ

あいちトリエンナーレで把握された意見はコミュニティ側が 74 件、アート側が 53 件、コミュニティ且つアート側が 20 件、合計 147 件であった。下位レベルでは「Cg(31):アートを身近に感じてもらうための工夫をする」が 10/12 件で、このラベルのほぼ全てがあいちトリエンナーレからの意見で構成され、またその内訳をみるとコミュニティ側が 4 件、アート側が 6 件で両者から意見が集まっている。また「Fq(79)色々な人に見てほしい」が 6/9 件をあいちトリエンナーレが占めており、その内訳は半数以上がアート側であった。AP から抽出された意見ラベルが最も多かった。中位ラベルでは「Fq:AP は色々な人に開かれた表現である」が 11/24 件で、その意見の半数以上がアート側であった。また「Cg:AP はアートを身近に感じさせるきっかけとなる」が 21/59 件で約 1/3 の意見を占めており、その内訳をみると 3 つの立場から意見が集まっている。以上からあいちトリエンナーレの意見は、コミュニティ側、アート側両者の意見が同程度含まれているが、コミュニティ側は表現を身近に体感することを通じて AP を受け入れ､またアート側は AP において色々な人に開かれた表現を模索していることが分かった。

５－４　大地の芸術祭　越後妻有トリエンナーレ

大地の芸術祭で把握された意見はコミュニティ側が 50 件、アート側が 28 件、コミュニティ側且つアート側が 9 件、合計 87 件であった。下位ラベルでは「Bf(22):アートを体感して影響を受けた」が 4/7 件、中位ラベルでは「Gx:アートの体感を通じて地域環境を意識する」が 8/41 件、「Gu:AP はまちを活性化する」が 11/68 件、これら全てコミュニティ側の意見であった。以上より、大地の芸術祭の場合は、アートを通じて地域環境を意識したり、まちを活性化することを望むコミュニティ側の意見が多く見られた。

表７　各 AP の概要（一部）

PID	プロジェクト名	開始年	場所	エリア分類	料金形態	設置状況	頻度	概要	意見数
162	瀬戸内国際芸術祭	2010	香川県 高松市他	地域	無料/有料	常設/仮設	3年毎	瀬戸内海の島々と現代アートの祭典	156
68	あいちトリエンナーレ	2010	愛知県 名古屋市	都市	無料/有料	仮設	3年毎	愛知から新しいアートの動向を世界へと発信する国際芸術祭	147
173	大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ	2000	新潟県 十日町市	農村	無料/有料	常設/仮設	3年毎	地方APの革分け的な里山の芸術祭	87
199	中之条ビエンナーレ	2007	群馬県	都市	無料	仮設	2年毎	温泉＋故郷＋アートの祭典	62
137	混浴温泉世界	2009	大分県 別府市	都市	無料/有料	仮設	3年毎	温泉街の別府を舞台に実施されるAP	34

この他意見数の多かった中之条ビエンナーレと別府現代芸術フェスティバル 混浴温泉世界について分析したが際立った傾向は見られなかった。

６章：まとめ

・コミュニティ側は長期的にまち/地域と関わることを、アート側は新たな芸術活動の場を求めている。

・コミュニティ側は、AP が日常に非日常をもたらしており、地域に影響を与えてもいる。故に AP を地域に合わせる工夫も必要だが、つながりが活性化されて、またコミュニティ外への表現方法にもなる。一方アート側は表現の幅の拡大を求めており、拡大とは地域にしかないものやアート分野でないものを作品に活かすことを指す。またこれまでと異なる鑑賞者（コミュニティ）への表現力もたないといけないと言える。

・コミュニティ側は、日常に非日常を取り込むなどして、AP を通して現状に変化をもたらし問いかけをする機能をアートに求めている。一方アート側は時代の最先端を表現するためにコミュニティを意識し､コミュニティを表現の対象､仲間､場と捉えている。

脚注

1）パブリックアートに関する研究を目的とした NPO 法人。2007 年設立
2）コミュニティとアートの衝突事例の代表としてリチャードセラの「傾いた弧事件」などがある
3）地方型 AP の事例として 2000 年開始の「大地の芸術祭　越後妻有トリエンナーレ」が挙げられる。
4）都市を人口 2000 人以上、農村を人口 2000 人未満と定義した。

参考文献

（1）橋本敏子 1997 『地域の力とアートエネルギー』学陽書房
（2）増山尚美 2001 『コミュニティアートに関する一考察』北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
（3）ドキュメント 2000 プロジェクト実行委員会 2001 『社会とアートのえんむすび 1996-2000 つなぎ手たちの実践』トランスアート
（4）豊原正智・谷悟 2002 『アートプロジェクトという名の回路―相互触発を生じさせるための構想と実践―』芸術
（5）石松丈佳 2003 『アートプロジェクトに関する実践的立場からの考察―地域型コミュニケーションとコンセプトの両立の重要性』岐阜市立女子短期大学研究紀要
（6）丹治嘉彦 2004 『地域におけるアートプロジェクトの意義・実践とその可能性』環境芸術 ： 環境芸術学会論文集
（7）八田典子 2004『「アートプロジェクト」が提起する芸術表現の今日的意義―近年の日本各地における事例に注目して―』島根県立大学　総合政策学会
（8）八田典子 2004 『芸術作品の成立と受容における「場」の関与』島根県立大学　総合政策学会
（9）中川真 2007 『差異の包摂に向けて―大阪市西成区、浪速でのアート実践』日本ボランティア学会学会誌
（１０）工藤安代 2008 『パブリックアート政策』勁草書房
（１１）芹沢高志 2009 『触媒としてのアート―別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」を巡って―』美術出版社
（１２）久木元拓 2009 『集団的知性の形成から捉えたアートプロジェクトの組織経営的政策分析・評価試論』文化政策研究第三号
（１３）藤井さゆり・佐藤慎也 2009 『アートプロジェクトにおける展示空間と作品形態に関する研究』日本建築学会大会学術講演梗概集
（１４）荒川圭太・真野洋介 2010 『アートプロジェクトから派生した活動の要因と意義に関する研究』東京工業大学社会理工学研究科
（１５）帆足亜紀 2011 『アートプロジェクト運営ガイドライン』公益財団法人東京都歴史文化財団　東京文化発信プロジェクト室
（１６）小泉元宏 2011 『地域を超える「地域」への想像力―「アートプロジェクト」の時代における「地域とアート」の関係性』住宅 vol.60.,2011
（１７）住まい・まちづくり活動推進協議会 2011 『地域の住まい・まちづくり活動研究（アートプロジェクト編）』住まい・まちづくり活動推進協議会調査研究（Web 資料）